

## エフタルに関する中国史料について

船木, 勝馬

<https://doi.org/10.15017/2335122>

---

出版情報 : 史淵. 61, pp.57-77, 1954-06-10. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

## エフタルに關する中國史料について

船 木 勝 馬

西紀四世紀から六世紀にかけての中央アジアの歴史は、内外諸方面の碩學の研究によつてかなり明確に知り得るに至つたにも拘らず、史料が極めて乏しいために今日尙未解決の問題が數多く殘されてゐる。この期間にタールィム盆地を境として東西の二大勢力を形成してゐたのが、東方の蠕蠕であり、西方のエフタルである。特にトハールスタンを中心として、東西トルキスタン、西北印度に亘る廣大な地域を席卷したエフタルに關しては、夙に歴史・言語・民族・考古等の各方面から研究が推し進められて來た。然しその史料の殘されたものが零細であるために、その解釋に種々の異論を生じ、決定的な結論が得られない状態である。而もその史料たるや異同があつて、その何れをとるべきかに困惑をさへ感ずる。中國側史料にもかゝる疑問が若干見出されるので、從來とかく看過され勝ちの中國側史料そのものを再検討して、エフタル研究の一方向を明かにし、之に基く試論を提出しておきたい。

現存するエフタルに關する中國側の史料は僅少であるのみならず、最も古いと考へられる魏書卷一嘯嗟傳は散逸して原型を止めず、北史のそれによつてその闕が補はれて居り、續く周書卷五・隋書卷八・梁書卷四の三正史のエフタルの傳は何れも異同あり、無批判に信憑するを得ず、その後編纂された通典等の記事は殆ど前史の踏襲に過ぎない。之等諸書に散見されるエフタルの記事を彼此照合して批判解釋することは、エフタル研究の第一歩であり、又この基礎的研究を無視してエフタルを論ずることは不可能でもある。

正史中最初にその傳を收載してゐる魏書西域傳は周知の如く散佚して、北史西域傳を以てその闕が補はれたものであるが、北史西域傳は魏書・周書・隋書の該傳によつて編輯されてゐるので、散佚前の魏書西域傳（以下魏收書と稱す）は之等諸書の校合検討を俟つて明確にされ得ることは論ずるまでもない。諸書の中最も詳細な記事を掲げてゐる現行魏書（以下魏書と稱す）嘸囉傳も又この例に洩れぬ。而も魏書嘸囉傳の記述は神龜二年（五一）西方求經の途次その王庭を訪れた宋雲・惠生の記録を中心としてゐるので、その行記を掲載してゐる洛陽伽藍記卷五擬圓寺の條をも併せて考究すべきことは喋々するまでもない。本稿に於てはこの魏書嘸囉傳の記事を中心として考察することとする。

エフタルが中國と最初に交渉をもつたのは北魏の太安二年（四五）十一月であり（魏書本紀）、以來魏書本紀を見ると太昌元年（五一）六月に至るまでに前後十三回に亘つてエフタルの北魏への遣使朝貢が行はれてゐる。その間延昌年間（五一三年）

には高徽・高吞が北魏から派遣せられてエフタルに赴き、神龜二年には前記の宋雲・惠生がエフタルの王庭を訪れてその王に謁見してゐる等から推して、北魏末にはエフタルに關する中國側の知識はかなり深いものがあつたと思はれる。西魏・北周の頃に至ると大統十二年（五四）西魏廢帝二年（五五）明帝二年（五五）の三回エフタルの入貢のことが見え（周書本紀）、周書異域傳の嘸囉傳はその記録に基いたものであらう。その後は周書同傳に「爲突厥所破、部落分散、職貢遂絶」とある如く、エフタルの部族が分散して職貢を絶つに至つたのである。たとへ隋の大業中に朝貢したとしても（隋書嘸囉傳）、それは四

散したエフタルの餘裔の或る一部のものに過ぎない。隋書吐火羅傳に「與挹怛雜居」とあるのはその事情を物語つてゐる。従つて隋書挹怛傳はこの點に考慮を拂つて考察されねばならぬ。又梁書に見える滑國傳は勿論天監十五年（五一）普通元年（五一）同七年（五二）の滑國入貢（梁書滑國傳）によつて知られたものであるが、又滑國に於ては梁書にその傳が見える河南人

によつて始めてその言語が通じてゐたことが梁書滑國傳に記されてゐるが、梁と通交してゐた河南人から得た滑國の知識も梁書滑國傳に混入してゐることを見逃し得ない。而してその記事中の滑を後漢の永建元年（一二）班勇に従つて北匈奴を

攻撃した八滑とみなす牽強附會の説は既に榎一雄氏が明かにされた如く信賴するに足らぬ。

之等四書には各々異同があり、その何れをとるべきか遠かに決し難い點が少くないので、先學の諸勞作を逐つて、淺學を願みずエフタル問題の一端を究明しておきたい。

註 1 拙稿「魏書西域傳考」(『東洋史學』第二・五輯)

2 前掲論文

3 魏書卷三二高徽傳及び高容傳

4 河南については梁書卷五四にその來歴が詳細に傳へられ

5 榎一雄氏「エフタル民族の起源」(『和田博士選脩記念東洋史論叢』所收)

てゐるが、益州を通して河南と梁との交易が盛に行はれてゐた如くである。

## 二

エフタルの種族について魏書嚙噠傳は

大月氏之種類也。亦曰高車之別種。其原出塞北。自金山而南。

と傳えてゐる。即ちエフタルを大月氏の種族となす説と、高車の別種でその原は塞北に起り、アルタイ方面から南下したとなす説とが併記されてゐる。エフタルの種族問題の決定はこの記事の取扱ひから始まるので、この兩説を分析して考察することとする。

蓋しエフタルは周書・隋書にも述べられて居り、魏書とともに三書の關係を明確にしておかねばならぬ。魏書西域傳を通覽すると、そこには大月氏國の獨立した傳がたてられてゐる。魏收書西域傳中に大月氏傳が掲げられてゐたことは、魏書西域傳の序文に董琬等の報告を記してゐるが、その中で彼等が當時の西域地方の形勢を四域に分ち、その一域に「者舌以南月氏以北」を擧げてゐることから推しても明かである。而も周書及び隋書には大月氏に關する所傳はなく、北史に大月氏傳が見えることは魏收書に大月氏傳の存在を求めざるを得ない。魏書大月氏傳はかなり詳細にその狀況

を傳えて居り、中でもその王寄多羅が師を興し南方の北天竺を侵略し、乾陀羅以北の五國を役屬せしめ、その勢力を擴張したことが記されてゐる。又大月氏傳と同じく魏收書に收載されてゐたと思はれる小月氏傳には、寄多羅の子がその都城たる富樓沙城に治して小月氏と稱してゐたことが述べられてゐる。北魏の頃に寄多羅月氏に關して如上の知識を有してゐたことから考へて、若しエフタルが大月氏の種類と見做されてゐたならば、當時廣大な地域に勢力を伸長してゐたエフタルと寄多羅月氏との關係が魏書西域傳中に明示されてゐる筈であるが、この兩者の交渉を察知し得る史料は皆無である。従つてエフタルと大月氏説が魏收書の採つた説とは考へ難い。

周書嚙噠傳は「大月氏之種類」とのみ記してゐてエフタルと高車説については記してゐない。若し周書嚙噠傳の「大月氏之種類」が魏收書を踏襲したものであるならば、續いて「高車之別種、其原出塞北、自金山而南」と云ふ高車説も當然引用されてゐるに相違ない。こゝに於て大月氏説は周書の採つた説と解すべきであらう。勿論周書異域傳には大月氏に關する所傳はなく、周書は魏收書の大月氏がエフタルとなつたと解してゐたのであらう。或は當時寄多羅が乾陀羅以北の諸國を役屬せしめた事件と、エフタルが康居・于闐等三十餘國を征服した事件とを混同し、而も兩者ともその中心がトハレストアの同一地域内であつたためにかく解したとも考へられる。周書波斯傳を見ると「大月氏之別種」とあるが、波斯は大月氏の別種と考へたのも、前述の解釋から推して、寄多羅月氏發展の結果と見做したに相違ない。因に北史波斯傳は周書の大月氏の別種説を採つてゐない。要するに周書のエフタルと大月氏説には確たる根據が認められぬ。

隋書挹怛傳も又大月氏説を採つてゐるが、同書吐火羅傳を見ると「與挹怛雜居」とあり、隋代に至るとエフタルは突厥に征服せられ、その部族は分散してトハレストア地方で僅かに餘喘を保つてゐたに過ぎないので、隋書の大月氏説は地理的關係から大月氏の種と考へたものか、或は隋書西域傳中の諸國の記事に屢々見受けられる如く周書を祖述したものの何れかであり、その信憑性は稀薄である。

エフタル！高車説は魏書・北史に見え、他書には求められないので、魏收書に記された説であり、恐らく北魏時代の記録に依據したであらうと思はれる。而して北史は之を繼承したものに過ぎない。エフタルを高車の別種と考へるからには後文に「其原出塞北自金山而南」と記す如くアルタイ山に起原を求めるのは當然である。然らば當時高車説が何に依據して生れたものであるかを究明しなければならぬ。そこで高車とエフタルとの交渉を辿つてみることにする。

高車が天山北麓に獨立したのは西紀四八一年頃と推定されてゐるが、高車とエフタルとの交渉が史上に始めて見出されるのはこの後である。魏書<sup>卷一</sup>高車傳によると、高車は南北の兩部に分れ、阿伏至羅が北方、窳奇が南方を夫々支配したのは太和十一年<sup>(四八七年)</sup>の頃と見える。その後窳奇はエフタルの殺す所となり、その子彌俄突は捕えられ、その衆が四散したと傳えられてゐる。この事件の繫年は明確に知り得ないが、少くとも太和十一年を下ること間もない頃であらう。續いてエフタルは再び高車を伐ち、先に虜せられてゐた彌俄突は高車の國人に迎えられて、その主となつてゐる<sup>(五〇年)</sup>が、肅宗の初<sup>(五一六年)</sup>高車は蠕蠕と戦つて敗れ、彌俄突が蠕蠕主の醜奴に捕へられその頭を飲器とされるに及び、高車の部衆は擧げてエフタルに入つたと傳えられてゐる。更に數年を経てエフタルは彌俄突の弟伊匄の高車に還るを聽し、伊匄は國に歸り北魏に使を遣して表を奉じてゐるが、之を魏書本紀に求めると神龜元年<sup>(五一八年)</sup>四月のことである。

太和十一年から神龜元年に至る間に以上の如き高車とエフタルとの交渉が見られ、高車の部衆が悉くエフタルに投入するに至り、その關係が緊密となつたことは明かである。又魏書嚙噠傳の記事が六世紀前後の知見に基いてゐることから推して、或はエフタルが高車の別種ではないかと考へられたものではあるまいか。而もこの推測はエフタルのアルタイ起源説をも類推して、魏書のエフタル！高車説が生れたのではあるまいか。ルネ・グルツセ氏はこの高車説、アルタイ起源説を宋雲の記述によると考へてゐるが、特にエフタルの王庭を訪れてゐる彼の行記に之等諸説が見られるならば注目しなければならぬ。然し現存する宋雲等の旅行記には之等の記事は見當らなう。

この高車説に對して疑義が抱かれる第一の理由はエフタルの言語に關する魏書嘸唼傳の「其語與蠕蠕高車及諸胡不同」註とある記事から推して高車とエフタルとは言語を異にしてゐたと思はれることである。既に述べた如く延昌中には高徽等が、神龜年間には宋雲等が親しくエフタルに赴いて居り、宣武帝・孝明帝・孝莊帝の三代の間殆ど毎年踵を接してエフタルの朝貢が行はれてゐること等を併せ考へると、エフタルの言語についての北魏側の知識はかなり正確であつたに相違ない。エフタルの言語に關しては榎一雄氏の精緻な論考があるので詳論をさげ、こゝでは高車説をとり難い點のみを明かにするに止める。次にエフタル民族の勃興時代からも高車説は首肯し得ない。既に述べた如く高車が獨立したのは太和十一年(四八七年)以後であるが、それより先文成帝の太安二年(四五四年)にエフタルは北魏に朝貢してゐる(魏書本紀)。通典卷九三嘸唼の條に「後魏文成時已八九十年矣」註とある記事はこの太安二年の遣使の結果傳へられたものに他ならぬ。この通典の記事は太平寰宇記卷八三嘸唼の條にも記されてゐるが、恐らく魏收書には收められてゐたものに相違ない。而して北史嘸唼傳を編するに際してこの條文は北魏のみに必要な記事であるために削除せられたものであり、通典は魏收書を忠實に傳へたものと解せられる。又通典はこの條文のみでなくその種族について

嘸唼國或云高車之別種。或云大月氏之種類。其源出於塞北。自金山至。

と記し、魏收書の高車説を先に記し、次に周書の大月氏説を述べ、その後アルタイ起源説を掲げてゐる。然るに北史は大月氏説を先にして、次に高車説及びアルタイ起源説を一括してゐる。通典が種族についての兩説を述べ、次いでその起源を記して、その來歴に及んでゐるのは周倒な敘述と云はざるを得ない。北史は高車説とアルタイ起源説とを切離すことなしに周書の大月氏説を冒頭に記したものと思はれる。通典のエフタルの來歴が文成帝の太安二年を遡ること八九十年であることを認めれば、エフタルの勃興は四世紀の中葉(三六六年頃)に比定される。梁書滑國傳に「元魏之居桑乾也、滑猶爲小國」とある頃であらう。この期間にエフタル||高車説を思はせる關係史料は皆無である。エフタル||高車説にはかゝ

る點から考へて二三の疑問が残される。

以上大月氏説、高車説の成立の事情を諸史料を照合しつゝ検討してみたが、何れも遽に賛同し得ない疑點があり、又當時にあつても高車であるか、大月氏であるか、又梁書の如く車師の種であるかを決しかねたものではあるまいか。エフタルの種族問題は中國側史料の記述によつて決定的な結論を導くことは不可能であり、言語・土俗等他の諸方面から考究されねばならない。エフタル民族の中には、前述の如く高車の民が部落を擧げて投じたものがあり、又蠕蠕主婆羅門の姉妹三人がエフタル王に嫁してゐたため、婆羅門が正光二年(五二一年)北魏に叛してエフタルに投じたことが魏書蠕蠕傳に傳へられてゐる如く、エフタルと蠕蠕との婚姻が行はれて居り、或は隋書吐火羅傳によるとエフタルと雜居してゐたことが記されてゐる等、エフタル民族は高車の民も、蠕蠕の種も、又エフタルに先行してトハールスタンに據つてゐた寄多羅月氏の餘裔も混入して、複雑な民族構成をなしてゐたことは見逃せない。之が中國側史料の混亂を招き、遂にはその種族問題の解決に支障を來し、今日まで尙その課題が残されることにもなつてゐるのである。

註1 松田壽男氏「高車獨立年代考」(回教圖一の二)

2 資治通鑑卷二四七梁紀によると天監七年即ち北魏の永平元年(五〇八年)の條に見える。

3 從來の諸説及び高車説を主張する宮崎五十騎氏の詳論(嗚嚕民族の發展「青丘學叢第四・六號」)には史料の取扱上疑問がある。

4 René Grousset: *L'Empire des Steppes*, Paris, 1938, p. 110

5 この記事は周書、隋書にはない。魏收書の記述と認められる榎一雄氏「エフタル民族に於けるイラン的要素」(史學雜誌六一の二)

7 文献通考卷三三八嗚嚕の條には「七八十年矣」とあるが、太平寰宇記卷一八三嗚嚕國の條には「八九十年」とあり、文献通考の記事は誤寫であらう。

### 三

エフタルの位置並びに都城に關して魏書は次の如く述べてゐる。

エフタルに關する中國史料について



在于闐之西。都馬許水南二百餘里。去長安一萬一百里。其王都拔底延城。蓋王舍城也。其城方十里餘。多寺塔。皆飾以金。

この記述も又無批判に信用することは出来ない。周書及び隋書と照合して考察を加へることとする。

地理的に「于闐之西」に在りとなすのは周書にも見られる所であり、その方位に誤が認められる譯ではないが、一應魏收書の記事を、周書が祖述したものであるか、或は周書のみ記述であるかを明かにしておく。魏收書の方位に關する記述の特色は全て既述の而も最も近い國を基準としてゐる點である。但し嚙嚙以下七國はその撰述の史料を異にしてゐるために注意を要する。之等七國は全てエフタルに役屬してゐた關係から嚙嚙傳を最初に記して居り、そのため、嚙嚙のみは遠近關係が順を追つてゐない。嚙嚙に續いて「朱居國在于闐西」とあるのは決して朱居國が嚙嚙國より西方に在つたことを意味するものではない。兩國共に于闐の西方にあることも是認して何等支障を來さない。唯「在于闐之西」と特に助詞の「之」を附してゐることは注目すべきである。即ち周書の表現は「葱嶺之西」、或は「白山之南」とか、更には「大月氏之種類」等の如く全て「之」を用ひてゐる。之に對し魏書には前述朱居國の條からも明かな如く助詞「之」は全く使用されてゐない。これによつて「在于闐之西」は周書の記述の如く解せられる。然し周書の位置及び方位の叙述は葱嶺及び白山等の山を基準にして表はされてゐるが、嚙嚙のみは例外であるのは何故であらうか。粟特・安息が全て葱嶺の西と明記されてゐるが、エフタルの住地たるトハレスタン地方は白鳥博士が考究された如く、廣義の葱嶺山中と考へられてゐたのではあるまいか。そこで周書の嚙嚙傳のみはその直前に記されてゐる于闐を基準とした方位を記すに至つたのであらう。

次に「都馬許水南二百餘里」とあるのは明かに隋書挹怛傳の「都烏澹水南二百餘里」を引用したものである。之については別に明かにした如く河水を基準としてその方位及び距離を記載してゐるのは隋書西域傳のみに見られる特殊な表現法

である。而して既に分散した隋代のエフタルの中心が烏淪水 (Oxus) の南に在つたことを述べたものと考へられる。最後にエフタルの都城即ちその中心地に關して検討しておきたい。魏書によると

去長安一萬一百里。其王都拔底延城。蓋王舍城也。其城方十里。多寺塔。皆飾以金。

とある。先づ里程について魏收書は全て代都からの距離を記してゐるが、エフタルのみ長安を基點としたとは思はれない。又朱居國をはじめエフタルに役屬してゐた七國には里程が記載されてゐないので、魏收書の嘸唵傳も里程は欠けてゐたと解せられる。之に對し周書は長安からの里程に統一してあり、周書嘸唵傳の「東去長安一萬百里」に依據したものに相違ない。續いて「其王都拔底延城、蓋王舍城也、其城方十里餘」とある記事も周書の「其王治拔底延城、蓋王舍城也、其城方十餘里」の引用を思はせる。即ち北魏時代の知識は後に「無城邑、依隨水草、以氈爲屋、夏遷涼土、冬逐煖處」と掲げる如く、エフタルは水草を逐つて遷徙常なき游牧の民で、夏冬はその王庭を異にしてゐることのみで、固定した都城と云ふべき程のもの知られてゐなかつたのである。宋雲等が神龜二年(五一) (五) 其王庭を訪れた時の記事の中に「無城郭、游軍而治、以氈爲屋、隨逐水草、夏則隨涼、冬則就溫」(洛陽伽藍記卷五)とある知見によつても明かである。又隋書に「都城方十餘里」に續いて「多寺塔、皆飾以金」とあり、寺塔に關する項は隋書によつたもので決して魏收書に都城について記されてゐたとは考へられない。思ふに魏收書嘸唵傳には位置及び都城に關しては全く觸れてゐなかつたのである。周書・隋書に至つて都城が明記され、エフタルが游軍して治す時代から、一應定着する状態に至つたと解せられる。寺塔の建立が隋書に見られるのは後に詳論するが、必ずしもエフタルが佛教を信奉してゐたことにはならない。

周書に見える長安から一萬百里にあるエフタルの都城たる拔底延城は既に諸家によつて考究せられた所であるが、拔底延城はマルクワルト氏の説く如く Padiyan の音譯で、王舍城はその意譯と解すべきであらう。唯その位置については諸説

あり、重松俊章氏はバルク説を唱え、榎一雄氏はマルクワルトの邊換城 (Warwaliz) 説を排してグルル (活路) 説をとつてゐる。拔底延城が長安から「一萬百里」の地點であることが明記されてゐるので先づ之を基礎として考察を加へておきたい。今魏書に見える當時のトハーレスタン地方の中心をなしてゐたと思はれる吐呼羅國の條に「去代一萬二千里」とあるが、當時の代・長安間の里程が略々千九百里であることは夙に松田壽男氏によつて明かにされた所であり、拔底延城は魏書の吐呼羅國にあつたことは疑ない。即ち拔底延城は魏書吐呼羅傳に「國中有薄提城」と見える薄提城に他ならぬ。魏書同傳によると吐呼羅國の領域は

東至范陽國。西至悉萬斤國。中間相去二千里。南至連山。不知名。北至波斯國。中間相去一萬里。

とあり、悉萬斤はサマルカンドであるが、范陽國については明かでない。唯唐會要<sup>卷七</sup>及び新唐書<sup>卷四</sup>三下に月氏都督府の領州を列記してゐる中の一州に范湯州と稱する州名が見え、この范湯州が拔特山城に置かれたことが記されてゐるが、恐らくこの范湯州は魏書吐呼羅傳に見える范陽國の地であらう。拔特山城は所謂バダフシヤンであり、范湯國はバダフシヤンを中心とした地方にあつたと思はれる。即ちバダフシヤンからサマルカンドに及ぶ一帯が、北魏の頃吐呼羅の名で呼ばれてゐたのである。太平寰宇記<sup>卷八六</sup>吐火羅國の條に「薄提城今名薄底延城、在國北」と薄提城が薄底延城と稱せられてゐることが記されてそれが吐火羅國の北方に位置してゐることが明示されてゐる。この記事は魏書吐呼羅傳に薄提城は周币六十里とあり、周書嚙噠傳に拔底延城が方十餘里とあり、兩者が略々同規模であることから符節を合する。又拔底延城がトハーレスタンの北部に在つたことが知られる。而も魏書吐呼羅傳の薄提城の城南に「有西流大水」とあり、大水即ち Oxus 河の北方に拔底延城が在つたと解せられる。かゝる點から考へると、拔底延城をバルクに比定することも、邊換城即ち Warwaliz 乃至グルルとなす説も適當でない。然らば之を何處に求むべきであらうか。

最盛期のエフタルの中心をトハーレスタンの二ヶ所に想定された榎一雄氏の所説は妥當である。即ちその一は前述のグ

ールに當て、他は大唐西域記に見える唹摩咀羅國に當てゝゐるが、グールを拔底延城に比定する説には首肯し難く、むしろ唹摩咀羅國を拔底延城に當つべきであらう。周書噉唾傳に

其俗又兄弟共娶一妻。夫無兄弟者。其妻戴一角帽。若有兄弟者。依其多少之數更加帽角焉。

とあるエフタルの風俗は拔底延城に於けるその風俗であり、大唐西域記<sup>卷一</sup>唹摩咀羅國の條に

其婦人首冠木角。高三尺餘。前有兩岐。表夫父母。上岐表父。下岐表母。隨先喪亡。除去一岐。舅姑俱沒。角冠全棄。

とあるのはその俗の名残を留めてゐるものであり、拔底延城を唹摩咀羅國に比定すべきであらう。足立喜六氏は Roshan 山脈の南の平原に唹摩咀羅國の位置を求めてゐるが、之はトハールレスタンの東北方に片寄り過ぎてゐて賛同し難い。堀謙徳氏は之を現在の Kokcha 河の南、Kishm と Faizabad との間に比定してゐるが、之は「城南有西流大水」とある周書の記事に聊か適合しな嫌があるが、當時の交通路から推して檀一雄氏も説かれる如く Kunduz から東方 Faizabad に至る Kishm の東方とすべきであらうが、むしろ Kokcha 河の北岸に唹摩咀羅國即ち拔底延城を求めるのが妥當であらう。

隋書挹怛傳に述べられてゐる都城はグールに關するもので「多寺塔、皆飾以金」とある記述は、大唐西域記<sup>卷一</sup>活國の條に

多信三寶。少事諸神。伽藍十餘所。僧徒數百人。大小二乘。兼功綜習。

とある記事と符合して居り、決して周書に記れたエフタルの都城拔底延城内に寺塔が建立されてゐたものではなく、隋代に會てエフタルの中心地の一であつたゴール地方に佛教が行はれてゐたことを物語つてゐるに過ぎない。従つて必ずしもエフタル民族の間に佛教が盛行してゐたと解することは出来ない。宋雲等がエフタル王に謁した時の記事には「不信佛

法、多事外神、殺生血食」とあり、又ガンダーラに侵入したエフタルが「立性凶暴、多行殺戮、不信佛法、好祀鬼神」ことを傳えて居り(洛陽伽藍記卷五)、エフタル民族が佛教を信奉してゐなかつたことは確實である。即ち大唐西域記の「少事諸神」とあるものは活國のエフタル民族の間に行はれてゐたものである。榎一雄氏が「多寺塔、皆飾以金」の記事に疑問を抱き、西陽雜俎續集に八

西域厭達國有寺戶。以數頭驢運糧上山。無人驅逐。自能往返。寅發午至。不差晷刻。

とある記事を引き、更に大唐西域記活國の條の一文を以て、エフタル民族の中に佛教を信するものもあつたのであらうと推測してゐるが、註11西陽雜俎の「厭達國有寺戶」とは、エフタルが侵略した烏菴國の狀況を傳えたものに相違ない。即ち魏書烏菴國傳に

西南有檀特山。山上立寺。以驢數頭運食。山下無人控御。自知往來也。

とあることから明かであり、又法苑珠林卷三九に所引の西域志に

烏菴國西南有檀特山。山中有寺。大有衆僧。日日有驢運食。無控馭。自留食遺。莫知所在。

とある如くエフタル治下の烏菴國の狀態を述べたもので、之によつてエフタル民族が佛教を信奉してゐたと推論することは出来ない。又大唐西域記活國の條の記事は隋書挹怛傳の「多寺塔、皆飾以金」と同じく、エフタルが突厥のために潰散した後のことであり、活國のエフタルの後裔は諸神を祀り、他の佛教を信奉する民族によつて活國內に寺塔が建立されたのではあるまいか。又上述の史料から推して、エフタルの王庭たる拔底延城に伽藍の存在を認めることは出来ない。

中國側史料に現れた所を綜合すると、北魏末のエフタルは未だ夏冬その王庭を異にする遊牧生活を行ひ域郭を構へるに至つてゐないが、北周の頃には拔底延城なる都城をトハイレスタンの玄奘の所謂毗摩咀羅國附近に營んでゐたと思はれる。やがて突厥の侵入によつてエフタルの一部は吐火羅の地に殘存してゐたが、その中心はグール地方に移行した如くで

ある。魏書はエフタルの位置及び都城に關しては全く言及してゐなかつたと思はれる。

註1 白鳥庫吉博士「大秦傳より見たる西域の地理」(「西域史

研究」下所収)

2 拙稿前掲論文

3 Marquart: Wehrort und Arang, Leiden, 1938, S. 43—

44

4 重松俊章氏「嚧嚧種族考」(史學雜誌二八の二)

5 榎一雄氏「エフタル民族の起源」

6 松田壽男氏「魏書西域傳の批判と悅般國の方位」(大正大

學報第十輯)

7 榎一雄氏前掲論文

8 足立喜六氏「大唐西域記の研究」下卷九五八頁及び上卷所

收附圖第二

9 堀謙徳氏「解説西域記」九五—頁

10 榎一雄氏前掲論文

11 榎一雄氏「エフタル民族に於けるイラン的要素」

#### 四

魏書嚧嚧傳は續してその風俗につきて

風俗與突厥略同。其俗兄弟共一妻。夫無兄弟者。其妻戴一角帽。若有兄弟者。依其多少之數更加角焉。衣服類加以纒絳。頭皆剪髮。

と記してゐる。エフタルの俗を大觀して「與突厥略同」とは周書に記載されてゐる所である。魏書を通覽するに未だ突厥に關する記事は全く見當らず、突厥について知識がない魏書に突厥の俗と略々同じと記される筈はない。この句は突厥傳が初見せられる周書の記事であることは明かである。周書にかく記されてゐることを以て、直ちにエフタルをトルコ種と斷定するのは早計である。大唐西域記<sup>卷一</sup> 嚧摩咀羅國の條に

人性暴急。不識罪福。形貌鄙陋。舉措威儀。衣氈皮褐。頗同突厥。<sup>中</sup> 境鄰突厥。遂染其俗。

とあることを注意しなければならぬ。玄奘もエフタルの民族性が頗る突厥と類似してゐると報じてはゐるが、その原因を

エフタルに關する中國史料について

突厥と境を隣してゐたことに歸してゐる。北周時代に突厥に蹂躪せられてその境を接してゐたエフタルが漸次突厥の俗に馴染んで行つたことは當然であり、こゝに述べる如く突厥と略々同俗であり、又異なる點もあつたと解すべきで、全く突厥と同一であつたのではない。

次に兄弟が一妻を共有する一妻多夫の制度と、その夫の數に應じて婦人の帽子に角を附す風習とは周書に略々同一の記事があり、隋書は挹怛傳に之を傳え、挹怛と雜居してゐた吐火羅に於ても兄弟が一妻を同じくすることが同書吐火羅傳に見え、梁書滑國傳にも同一内容の風俗についての記述があることから推して、兄弟一妻の制と、その妻が夫の數を表す角帽を被る習俗とはエフタル特有のものであることは疑ふ餘地がない。唯魏收書に類似した記述が存したか否かは確認し得ない。洛陽伽藍記卷五所收の宋雲等の行記にはエフタルの王妃について「頭帶一角、長八尺寄長三尺、以玫瑰五色裝飾其上」と、王妃が一角帽を帶してゐたことは述べてゐるが、一妻多夫のことは記されずむしろ王が諸妻を各地に分つて之を巡歴すること即ち王のみは一妻多妻であることが認められる。通典卷一嘽嘽の條には魏收書に記されてゐたと思はれる俗を全て掲げた後に

又兄弟共娶一妻。無兄弟者妻戴一角帽。若兄弟者依其多少之數更加帽角焉。

と周書と殆んど同様の記述を加へてゐるので、或はかゝる制度・習俗が魏收書には記されてなかつたかと思はれる。

最後に「衣服類加以纓絡、頭皆剪髮」とある一文は周書・隋書には收載されてゐない。通典嘽嘽の條に、

衣服類胡。加以纓絡。頭皆剪髮。

とあり、之はエフタルの習俗の記事の冒頭に掲げられてゐて、以下續いて魏收書に依つたと思はれるので、衣服が胡に類し纓絡を以て飾り、剪髮であることは魏收書に收められたものである。服が胡に類し纓絡を着けることは他に多く見られる所であるが、髣髴の風は注目し値する。髣髴の風は早くからイラン系の民族の間に行はれてゐたものゝ如くであり、同

時代に髻髪の風が行はれてゐたことを傳へるものとしては周書波斯傳に「其俗丈夫髻髮」とあり、エフタルの西方に隣してゐた波斯國の男子にも同じく髻髪が行はれてゐる。又隋書康國傳にも「丈夫髻髮」とあり、北印度方面を見ると通典卷一九四の越底延國には「隋時聞焉」として「王及庶人髻髮」の狀を傳えてゐる。エフタルの髻髪の風に關して宮崎五十騎氏はかなり牽強な解釋をしてエフタルのトルコ系説を強調せんとしてゐるが、エフタル民族の髻髪の風を否定することは出来な註3い。かゝる點からこそエフタル民族の特色を導き出さねばならない、エフタルと波斯との交渉を究明しなければならぬ。髻髪に關する限りイラン的な傾向を認めざるを得ない。

エフタルの言語について魏書には「其語與蠕蠕高車及諸胡不同」と述べてゐるが、之が魏收書のみに記されてゐたことは通典の同記事に照しても明かであり、榎一雄氏の詳論によつて證された如く、エフタル註1高車説の最大の欠陥である。

註1 通典によると「胡」が附加されてゐるが、通典が正確に魏

收書を傳えたもので、魏書・北史は之を脱落したのであらう。

2 白鳥庫吉博士は「亞細亞北族の髻髪に就いて」（史學雜誌三七の四）の中で康國の剪髮とエフタルのそれとを詳論し

て、兩者の關係を明かにしてゐる。

3 宮崎五十騎氏は前掲論文に於て、エフタル註1アルタイ起源説を唱え、エフタルがトハレスタンに移住した結果その剪髮の風が行はれるに至つたと論じてゐる。

4 榎一雄氏「エフタル民族に於けるイラン的要素」

## 五

魏書厭浥傳は更に續けて

衆可十萬。無城邑。依隨水草。以氈爲屋。夏遷涼土。冬逐煖處。分其諸妻各在別所。相去二百三百里。其王巡歷而一行。每月一處。冬寒之時三月不徙。王位不必傳子。子弟堪任。死便授之。其國無車有輿。多駝馬。用刑嚴急。偷盜無多少皆腰斬。盜一責十。死者富者累石爲藏。貧者掘地而埋。隨身諸物皆置家內。

エフタルに關する中國史料について



とその俗について詳述してゐるが、之等の記述は全て周書にも隋書にもなく、魏收書に收められてゐたものと認めて誤あるまい。又通典嚠唳の條にも先づこの記事を引き、續いて兄弟が一妻を共有する周書に見える俗を述べてゐるが、こゝにも既に論じた如く通典の周倒な敘述が見られる。

その衆が十萬と云ふ數字は廣大な版圖を擴張したエフタルとしては餘りにも少いが、他に戸口に關する所傳は管見の限りでは全く無いので推測の域を脱しないが、之はエフタル治下の被征服民を加へないエフタル民族のみの人口であらう。隋書挹怛傳に「勝兵五六千」とある勝兵數はエフタルが突厥に破られて分散した結果挹怛國內に僅か勝兵五六千を留めるに至つたのであらう。エフタル民族の發展から推してその最盛期の勝兵は必ずや萬を下らなかつたであらう。

次にエフタルが水草を追つて夏は涼土を、冬は煖處を求めてゐたことは洛陽伽藍記卷五の宋雲等の行記に

無城郭游軍而治。以氈爲屋。隨逐水草。夏則隨涼。冬則就溫。

と明示してあり、エフタルが漢代の康居國に見られる如く夏冬の王庭を異にする遊牧を中心とする民族であつたことは明かである。然し梁書滑國傳によると

土地溫暖。多山川樹木。有五穀。國人以麂及羊肉爲糧。

とあるので或程度農業も行はれてゐたのである。エフタルの王が諸妻を分つて夫々別所に居らしめ、各地を巡歴することになつてゐる限り、諸妻の居所は部落を形成してゐたに相違ないが、周書の拔底延城の如く方十餘里もある大規模な都城であるとは考へられない。拔底延城に治すところとは、エフタルの勢力が擴張され、その役屬國からの頻貢のために或は北周の交に都城を營んだとも解せられるが、むしろ吐呼羅の都城たる薄提城にその治所を置いたに過ぎないのではあるまいか。

相續制度については王位繼承のみしか明かでないが、この場合には子弟の中からその任に堪ふるものを選んで、王位を

之に傳えることになつてゐる。かゝる制度は波斯國にも認められる。即ち周書波斯傳に

王即位以後。擇諸子内賢者。密書其名。封之於庫。諸子及大臣皆莫之知也。王死衆乃發書視之。其封内有名者。即立以爲王。

とあり、諸子の内の賢者に王位を繼承させる制度を擧げてゐる。この制度の類似からも又エフタルと波斯との關係を究明しなければならぬ。相續に關する所傳は他にはないが、隋書によるとエフタル民族が據つてゐた吐火羅傳に「生子屬其長兄」とあるので、一妻多夫の制と併せて考へると長子相續が行はれてゐたのではあるまいか。

エフタルに於ては車は用ひられず、専ら輿が使はれてゐたことは宋雲等も「王妃出則輿之」(洛陽伽藍記卷五)と傳えてゐることからも察せられるが、特に車が使用されてゐなかつたことはエフタルが遊牧の民であるので特筆するべきであらう。先に種族問題で詳論した如く、エフタルが高車の別種であつたならば「車輪高大、輻數至多」を以てその名稱が生じ、又「乘高車、逐水草、畜牧蕃息」せる高車トに倣つてエフタルも車を使用してゐる筈であり、車を使用してゐないことを以てしてもエフタルト高車説に賛同しかねる。彼等の交通が車を用ひず駝馬によつて行はれてゐたことは「多駝馬」とあることから推して想像に難くない。駝馬の産については梁書滑國傳に「其獸有師子兩脚駝野驢」とあり、魏書吐呼羅傳にも「有好馬駝騾」と見え、特にエフタルの馬は名駒であつたと傳えられてゐるが、隋書吐火羅傳によると

其山穴中有神馬。每歲牧牡馬於穴所。必產名駒。

とその所以を述べてゐる。又太平廣記卷四三五の馬の條には

吐火羅波訕山陽石壁上有一孔。恒有馬尿流出。至七月平旦。石崖間有石閣道。便不見。至此日。厭曉人取草馬置池邊與集。生駒皆汗血。日行千里。

とも見え、トハールスタン地方の馬はエフタル支配の頃も著名であつたと思はれる。

エフタルの刑罰が嚴重であつたことはその性が「兇悍」であつたことからも首肯されるが、偷盜に對してはその多寡に拘らず腰斬に處し更に連帶責任の制をとつてゐること等は、匈奴に於ける財産沒收注に比してその殘忍性を認めざるを得ない。周書波斯傳によると波斯の刑罰も又嚴重且つ殘酷である。

最後にエフタルの墓制が「富者累石爲藏。貧者掘地而埋」と貧富によつて相違してゐること、特に富者が石槨を作つてゐることが傳えられてゐるが、梁書滑國傳には「葬以木爲槨」とある。何れにせよ石或は木を以て槨を作る墓制が行はれてゐたことは明かである。之は波斯では屍を山に棄てるゾロアスター教の特色が見られるのに對して榎一雄氏が指摘された如く註エフタル民族が嚴格なゾロアスター教徒でない證左である。而して之はエフタルが佛教文化圏内に在つたことを物語つてゐるのではあるまいか。

註1 魏書卷一〇三高車傳

2 内田吟風氏「匈奴史研究」二六五頁

3 榎一雄氏「エフタル民族に於けるイラン的要素」

## 六

最後にエフタルの疆域に關する記事を一瞥しておきたい。エフタル民族の性が「凶悍能鬪戰」とある如く兇暴にして盛に征戰を行つてゐることは周書に同文が掲げられ居り、隋書は挹怛傳に「俗善戰」、吐火羅傳に「皆習戰」とあり、玄奘も大唐西域記卷一 𑖀摩阻羅國の條にエフタル民族の人性暴急なることを述べて居る所である。然し通典嚙曉の條には之に關して全く觸れてゐないので魏收書には記載されてゐなかつたであらう。周書に始めて記されたとしてもエフタルの民族性が兇暴であつたことは明かである。その版圖は

西域康居・于闐・沙勒・安息及諸小國三十許皆役屬之。號爲大國。

と記されてゐるが、周書には康居・沙勒の二國は除かれて「大小二十餘國」となつてゐる。思ふに周書異域傳には康居・沙勒兩國の傳がなく、于闐・安息二國の傳があるので、かく記したもので、決して北周の頃に役屬國の數が減少したことを意味しない。通典にも魏書と同文を掲げて、「號爲大國」とあるので、エフタルの疆域の記事は魏收書のそれに依據したと考へるのが至當であらう。

宋雲等はその四至を傳へて

南至牒羅。北盡勅勒。東被于闐。西及波斯。四十餘國皆來朝賀。中略四夷之中最強大。

と述べてゐる。之はエフタル最盛期の疆域であらうが、その比定は既に重松俊章氏の詳論があるので贅言を要しないが、二三敷衍しておきたし。

南境の牒羅を南印度の Chola に比定される重松俊章氏の所説は音韻の面から最も適切とは思はれるが、宋雲等の記録から推して Chola までエフタルの領域が伸びてゐたとは思はれない。魏書本紀の肅宗孝明帝の熙平二年(五一)一月及び七月の條に地伏羅なる國の遣使貢獻が記されてゐるが、この地伏羅が牒羅ではあるまいか。松田壽男氏の考説によつて明か  
な如く、地伏羅は魏書本紀・同西域傳に疊伏羅或は伏羅と記されてゐるもので、トハレスタンと北印度とを結ぶ中間地帯の Zabistan 地方である。註恐らくエフタルはトハレスタンからザイプリアンを経てガンダーラ地方を征服したであらう。之は宋雲等が乾陀羅國を訪れた時、ガンダーラを占據してゐたエフタルが「與闐賓爭境、連兵戰鬥已歷三年」とあり、闐賓即ちカシユミールと境を争つてゐたことから推察出来る。

北方勅勒の地はエフタルとの交渉が既述の如く密接であつた高車であることは論ずるまでもない。次にエフタルの東方への伸展について重松俊章氏・松田壽男氏は魏書于闐傳の「顯祖末蠕蠕寇于闐。于闐患之。遣使素目伽上表曰。西方諸國今皆已屬蠕蠕。云云」を引いてこゝに記された蠕蠕をエフタルと見做してゐるが、註之は蠕蠕の于闐攻略であつて、エフタ

ルの侵入と曲解することは出来ない<sup>註</sup>。然らばエフタルの于闐侵入は何時頃であらうか。魏書高昌傳によると「焉耆又爲嚙  
 嚙所破滅、國人分散」とエフタルの焉耆侵入のことが見えるが、その聖年は明かでない。この記事に續いて熙平元年  
 (五<sup>一</sup>年<sup>註</sup>)に高昌王麴嘉が内徙を求めた記事があるので恐らく熙平元年を遡ること遠くはあるまい。魏書本紀世宗宣武帝の延  
 昌元年(五<sup>一</sup>年)十月、同二年八月に嚙嚙・于闐が相並んで朝貢してゐることも、五世紀初にエフタルの勢力が東トルキス  
 タンに伸展してゐたことを推測せしめる。かくて于闐・焉耆を經略して、魏書高車傳に「蠕蠕・嚙嚙・吐谷渾所以交通  
 者、皆路由高昌倚角相接」とある如く、エフタルは蠕蠕・吐谷渾と高昌に於て勢力を接するに至つたのであらう。梁書滑  
 國傳に見える焉耆・龜茲・疏勒・姑墨・于闐・句盤等東トルキスタンの諸國がエフタルに役屬してゐたことも當然であ  
 る。最後に西方が波斯に及んでゐたことは重松俊章氏の所説<sup>註</sup>の如く、役屬國の中に安息國が入つてゐても、之はササン朝  
 ペルシヤ治下の安息の故地と解すべきである。

以下の記事は「其國去漕國千五百里。去瓜州六年五百里」とある隋書からの引用を除いて、他は全て北魏時代の記録で  
 あり、魏收書所收の記述である。

- 註 1 洛陽伽藍記卷五
- 2 重松俊章氏「嚙嚙種族考」(二)(史學雜誌二八の二)
  - 3 重松俊章氏 前掲論文
  - 4 松田壽男氏「寄多羅月氏に就いての考」(國史學第三二號)
  - 5 重松俊章氏「嚙嚙種族考」(一)(史學雜誌二八の一)及び松
  - 6 田壽男氏「魏書西域傳の批判と悅般國の方位」(大正大學  
 々報第十輯)
  - 7 拙稿「魏書烏孫國傳について」(史淵第五一輯)
  - 8 魏書本紀によれば熙平元年四月である。
  - 9 重松俊章氏 前掲論文

七

エフタルに關する中國側史料を分析してその疑點を提出し卓見を述べて來たが、從來のエフタル問題を解明する一方向

を展開して江湖の批正を仰ぐのが本稿の企圖した所であるが、小論に於て分析批判した結果から考へると、エフタルのアルタイ起源説乃至エフタル―高車（トルコ）説には従ひかねる疑問が残る。エフタル―大月氏説も確たる根拠が見られないが、エフタルが寄多羅月氏の故地に興起したことを推測せしむるに足る。トハイレスタンを中心として發展したエフタルにはその中心が拔底延城と後の活路城と二ヶ所あり、その習俗・文化等には多くのイラン的傾向が認められるが、勿論かゝる記事の中には支配民族たるエフタル民族を述べたものと、その被支配民族たる他民族の叙述と思はれるものとが混淆してゐるかも知られず、尙慎重な考究を要する。特にササン朝ペルシャとエフタルとの關係が密接であつたと思はれる點があり、タベリ等の西方史料と併せて考察すべきであるが、之は稿を改めて考察することとし、本稿に於ては煩を避け、て中國側史料にのみ止めた次第である。

尙小稿は榎一雄氏の秀れたエフタルに關する最近の諸論考に負う所大であり、特に記して深謝する次第である。こゝではそれ等諸論考に重視されなかつた中國側の史料批判の面から考察したものに過ぎない。

Critique on the Chinese Materials concerning *Ephtalites*

By K. Funaki

The Chinese materials as to *Ephtalites* are not only very few, but also are different from one another. Especially, the descriptions of *Ephtalites* in the *Wei-shu* (魏書), which are the oldest materials concerning the *Ephtalites*, had been lost, and supplemented by the descriptions of *Pei-shi* (北史) which were edited from *Wei-shu* (魏志) *Chau-shu* (周書), and *Sui-shu* (隋書). Hitherto the fundamental studies on these materials have

been neglected. Comparing and criticizing these materials, I reached to the following conclusions:

1. The Chinese materials on the race of *Ephtalites* are ill-grounded, and so we cannot confirm what race they belong to. But we can not deny that they sprang up in the boundary of *Tokhārestān*.
2. Their center-seats were *Himatala* (in *Ta'ang hsiyuchi* 大唐西城記) and *Gur*. It is in the *Pei Chou* (北周) period that the *Ephtalites*, who were originally nomadic tribes, constructed the so-called castle of *Padiyan* (拔底延城)
3. We can find many Iranian tendencies in their customs and culture, in which the customs and culture of both the governing race *Ephtalites* and other conquered races are mixed. In particular, the relation between Sassanian Persia and *Ephtalites* was intimate, we think.